

「桜の日」 ヨハネ 11章 25節

I 死者の蘇り

ベタニヤ村(西ベタニア)。エルサレムから3キロほどの村(ヨハネ一18)。「ユダヤ」に属しています。ヘブライ語で「ベタニヤ(בֵּיתַנְיָא)」とは、「家(בַּיִת)」+「貧しい(עני)」で、「貧しい家」「貧者の家」の意味です。

西ベタニヤに住むラザロという人が重い病気にかかり、今にも死にそうなる危篤の状況にありました(一一1)。そこで、ラザロと同郷のマリアとマルタが主イエスに助けを求めます。直ちに病気を治し、元気にしていただけるに違いないと考えてのことでしょう。

主はヨルダン川東岸にある別のベタニア(東ベタニア)に滞在していました。西ベタニアと東ベタニアの間は30キロほどあります。マリヤとマルタは、主が直ぐベタニアに来て、ラザロの重病を、奇跡的に癒されると期待していたに違いありません。

意に反して、主はなお二日間、東ベタニアに滞在し(ヨハネ一一6)、その後、西ベタニヤに向かいます。ラザロは既に死亡して、埋葬されて四日も経っていました(ヨハネ一一7)。

死後数時間経つと腐敗ガスが発生し、1日ほど経つと腐敗性水疱が発生し、2日ほど経つとそれが全身に現れ、腐敗臭を感じるようになります。既に4日も経っていますから、「既に臭くなっています」(ヨハネ一一30)。死亡していた証拠です。

主イエスは「**汝の兄弟は復活する**」(ヨハネ一一23)と言いますが、マルタは「**我知る、終わりの日には復活すると**」(ヨハネ一一24)と答えます。それに対して、主の言は「**我こそは復活かつ生命なり。我に委ねる者は、死ねども、生くる**」(ヨハネ一一25)。

II 復活とは

「復活」と訳される希語は「ἀνάστασις」。「ἀνάστασις」は「上へ」「再び」「後ろへ」「元へ」という意味。「ἀνάστασις」は「存立」「場所」「反乱」「紛争」「騒動」という意味。主は、「**ラザロは死んだ**」(ヨハネ一一14)と言いつつ、「**ラザロよ、出て来い**」(ヨハネ一一43)と言いつつ、「**死んだ人が出て来た**」のです(ヨハネ一一44)。

ラザロの復活は肉体的に死亡した人間が蘇ることでした。主の復活は黄泉に降られた主が天に上げられることで異なります。「復活」とは、死んで四日も経つたラザロが出て来たように、死なないことです。再び、元の

でしょう。

「**我こそが復活なり**」とは、基督の十字架を予見させるものです。十字架に架けられ、地上の生命を閉じられ、黄泉に降ったとしても、終わりではなく、むしろ始まりという含みでしょう。復活の予言です。

「生命」とは、神との交わりにあること。アダムとエバが、罪の結果、死んだのは、神との契約を破り、神との関係を切ったから。逆に生きることは、壊れた神との関係を修復し、神との交わりの中に復活すること。その道が基督です。

III 信ずる者は救われる

ポイントは、「**我に委ねる者は、死ねども、生くる**」(ヨハネ一一25)。日本語で「信じる」と翻訳される希語の「πιστεύω」は、「委ねる」「任せる」という意味。人に何かを委ね、任せるのは、その人を信じているからでしょう。先ずは、相手方が信頼できるか否かを検討して、大丈夫だと思ってから決めることになるでしょう。

「信じる」とは、希語で意味されているように、「委ねる」「任せる」ということであり、自己の意思や権限を相手に託し、相手の責任を引き受けるという人格的な行為です。聖書の宗教は、神の言葉に照らした真否確認を求めます。

アブラハム契約の旧約宗教、タルムードの猶太教、新約聖書の基督教、クルアーンのイスラームはこの原則を守っています。

日本語「信じる」は「疑いを持たず真実であると思う」などという意味です。プロテスタントの「信仰義認(信仰義化)」の誤解問題。「ただ信仰のみ(sola fide)」原則にズレが生じています。

日本語の感覚では、『イエスが基督である』と信じたなら救われる」と捉えられてしまうからです。イエスが基督であることを確信することは必要ですが、それでは義とされません。それで救われるなら、イエスが基督だと確信する悪魔や悪霊が天国に行きます。

信じるとは、**身を委ねること。自分の所有権を基督に移す信託です。**

「生命」である基督に信じ委ねる者は死んでも生きるのです。基督の復活は、私たちの復活でもあるのです。

1. 信仰に生きるキリストの弟子の養成

主の弟子は状況に左右されず聖霊に聞き従い、神を信じ人を信じて人々の救いと解放をもたらす。十字架に死んで神と共に生きるとは、自分と人々の罪からくる咎を覚悟し信仰と希望と愛を持って福音の祝福の中に生きることである。キリストの弟子の養成こそ教会の使命である。

2. 真理と祈りと讃美に満ちた信仰生活の指導

聖書の教え、真理は人を自由にする。祈りは問題や悩みを解決し、神の御心を確認する。讃美は癒しと喜びと力を与える。教会はそれらを教え指導し、互いの交わりの中で模範を造り出していく。

3. キリストを頭として愛によって結び合わされた共同体の形成

教会には多種多様な人々が神によってこの世から召し出されてくる。この信者を整え、神への奉仕という使命を果たすように導くには、キリストの弟子として十字架を負い主に従う指導者層が確立されなければならない。整えられ愛し合い一致した教会こそ神の栄光が現され成長する。

4. 隣人に対する愛に基づいた執り成しと伝道の実践

神を愛する人は人をも愛し、行いを伴う信仰を持つ。真理を知らず罪と咎によって苦しんでいる人々を愛し、執り成し、福音を伝えることによってこそキリストは成長し、祝福される。

5. 地域と社会に貢献する魅力的な教会員の歩みと家族形成

教会と教会員の活動・事業・啓発運動を展開し、社会に影響を与えながら、同時に愛し合う家族を形成し、接する人々に福音を現していくことが、日本のリバイバルに必要であると私たちは信じる。

今週の聖書

ヨハネ 11:1 さて、ある人が病気にかかっていた。ベタニアのラザロである。ベタニアはマリアとその姉妹マルタの村であった。

11:2 このマリアは、主に香油を塗り、自分の髪で主の足をぬぐったマリアで、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。

11:3 姉妹たちは、イエスのところに使いを送って言った。「主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」

11:4 これを聞いて、イエスは言われた。「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることとなります。」

11:5 イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。

11:6 しかし、イエスはラザロが病んでいると聞いてからも、そのときいた場所に二日とどまられた。

11:13 イエスは、ラザロの死のことを言われたのだが、彼らは睡眠の意味での眠りを言われたものと思ったのである。

11:14 そこで、イエスは弟子たちに、今度ははっきりと言われた。「ラザロは死にました。」

11:15 あなたがたのため、あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます。さあ、彼のところへ行きましょう。」

11:16 そこで、デドモと呼ばれるトマスが仲間の弟子たちに言った。「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。」

11:17 イエスがおいでになると、ラザロは墓の中に入れられて、すでに四日たっていた。

11:18 ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほど離れたところにあった。

11:19 マルタとマリアのところには、兄弟のことで慰めようと、大勢のユダヤ人が来ていた。

11:20 マルタは、イエスが来られたと聞いて、出迎えに行った。マリアは家で座っていた。

11:21 マルタはイエスに言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

11:22 しかし、あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、私は今でも知っています。」

11:23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」

11:24 マルタはイエスに言った。「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」

11:25 イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」

聖句 ヨハネ 11:25
 「我こそ、復活にして、生命なり。
 我に委ねる者は、死ねども、生くるなり。」

主イエス基督の復活日、おめでとうございます。

本日は基督復活記念日です。聖祭（ミサ）中心のカトリックでは「復活祭」と呼びますが、プロテスタントでは「復活日」「復活節」と呼ぶのが伝統的です。

西方教会の羅語では「Pascha」、東方教会のロシア正教では「Пасха」（日本正教では「パスハ」）、仏語では「Pâques」。希語「Πάσχα」に由来。元々ヘブライ語「פסח」（過越）に由来。聖書的です。

一方で、独語では「Ostern」、英語では「Easter」、日本語でも「イースター」。ゲルマン神話の春の女神「Eostore」に由来。

日本各地で桜が満開なので「桜の日」と呼んでみました。桜の花は、葉っぱ一枚もなく、枯れ木のような樹木に、一斉にパッと咲く。まさに「復活」。